様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月１８日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１７２００２０
研究課題名（和文）　モンゴルにおける宣教と聖書翻訳の宗教社会学的研究

研究課題名（英文）　Sociological Study of Religion on the Missionary Activities and the Translation of the Bible in Mongolia

研究代表者
滝澤　克彦（TAKIZAWA　KATSUHIKO）
東北大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：８０５１６６９１

研究成果の概要（和文）：本研究では、社会主義以前と以後のモンゴル国におけるキリスト教宣教と聖書翻訳に関する資料を、ウランバートル市のキリスト教会、英国のロンドン大学、ケンブリッジ大学、スウェーデンの王立図書館などにおいて収集し、分析を行った。社会主義以前と社会主義崩壊以後の資料を比較することによって、社会主義前後におけるモンゴルのキリスト教に対する接触様態の違いが浮き彫りとなり、そのような接触様態の変化が、聖書翻訳や教義、宣教論をめぐる議論と深く関係していることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：I have collected and analyzed the historical materials on the missionary activities and the translation of the Bible in Mongolia at churches in Ulaanbaatar, London University Library, Cambridge University Library, National Library of Sweden, and so on. By the analysis of missionary materials, I pointed out the difference of the contact mode of Mongolians and European missionaries based on the difference of historical conditions between before and after the Socialism. Furthermore I illuminated the fact that there is deep relationship between this contact mode and the controversies over the translation of the Bible and the theories on missionary activities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,600,000	480,000	2,080,000
２０１０年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・宗教学
キーワード：モンゴル、宗教社会学、宣教、聖書翻訳

１．研究開始当初の背景

本研究のそもそもの問題関心は、特定の宗教や信仰が国家・地域・民族・言語などの境界を越えて、特定の社会に受け容れられていくときのメカニズムにあった。このような《越境する宗教》は、当該の人々にとっては《回心》という形で認識されるが、この外的な持続と内的な変容の二重のプロセスは、近代化やグローバリゼーションといった文脈のなかで次第に意識されるようになっている。例えば、ファン・デル・フェールは、「近代」なるものと結びついたキリスト教の伝道と宗教的回心の関係性について論じている（van der Veer 1996）。このような視座は、

かつての宗教研究が「宗教」や「回心」なるものの本質を描き出そうとしていたのに対し、「宗教」という概念そのものや「宗教学」の誕生が、近代化やキリスト教のグローバリゼーションと結びついた極めて歴史的なものであるとの反省が前提とされている。本研究の背景には、このような「宗教」概念の不確かさが認識されるなかで、「宗教」なるものがある種の《境界》を越えていくことを、如何にして語り得るかという根元的な問いがある。

越境する「宗教」と個人的な回心の間の複雑な関係性についてはある程度認識されるようになってきたが、その実証的研究の蓄積は未だ十分であるとは言い難い。本研究では、その対象として、モンゴルにおけるキリスト教の宣教と聖書翻訳の歴史に注目した。

モンゴル国では、1990 年の社会主義崩壊以降、キリスト教（特に福音派）の台頭が著しく、社会主義時代には皆無だった信徒の数が僅か 15 年の間に人口の 6%前後に達し、教会の数は在来の宗教である仏教の寺院数を上回っている。このような現象が、現代における「宗教」の越境の性質を分析する上で極めて興味深い事例であると考えた。

一方で、社会主義以前のモンゴルでは、キリスト教の宣教は困難を極めていた。中世からの長い断絶を経て、再びモンゴル民族がキリスト教に接触するのは、18 世紀半ばに始まるカスピ海沿岸のカルムィク族に対するモラヴィア同胞団の伝道からである。その後も、カルムィク族やシベリアのブリヤート族、モンゴル高原のハルハ族などに対して多くの宣教師が派遣される。彼らは、学校や診療所の開設など啓蒙活動を実施する一方で、1846 年にはモンゴル語版聖書の全訳を完成させるなど、周辺的な諸活動を含めた積極的な伝道を展開していた。しかし、モンゴル人の改宗に関しては見るべき成果もないまま、1924 年のモンゴル人民共和国成立によって伝道の幕が引かれる。そのとき外モンゴルでキリスト教に改宗していたモンゴル人の数は、50 にも満たなかった。

このような社会主義以前と以後のモンゴルにおけるキリスト教宣教の成果を対比させることによって、そこにモンゴルにおける近代化と宗教をめぐる新たな視座が想定されるようになった。

以上のような実際起きてきた社会現象と宗教社会学における研究史を二つの背景として、本研究は始められた。

２．研究の目的

本研究の目的は、モンゴル宗教史におけるキリスト教宣教の試みを通史的に分析しながら、モンゴルにおける近代化と宗教の関係を明らかにすることである。1990 年の社会主義崩壊後、キリスト教は著しい成長を見せてきた。人口 300 万に満たないモンゴルに現在 200 以上の教会が存在し、これは在来の宗教である仏教の寺院数を上回っている。わずか 15 年あまりでこの成長は驚くべきである。

また、近年では、これまで顕著ではなかった草原部の遊牧民においても多くの信徒を獲得するようになり、さらに、国外出稼ぎ労働者の間でキリスト教会が重要な役割を担っていることは既に知られている。

このような現在の状況を、歴史的に遡って見ながら、モンゴルにおける近代化の特徴と、現代のモンゴルが置かれている状況について考察する。特に、社会主義以前のキリスト教宣教師の活動をとりあげ、伝道がなぜ成功しなかったのかを歴史資料をもとに分析し、宣教を通した文化的接触の現代的様態と前近代的様態とを対比させる。

また、ポスト社会主義期におけるキリスト教受容の条件として、社会主義の歴史的影響を重視している。特に、マルクス主義にもとづく反宗教政策は、鋳型となって西洋的＝キリスト教的な「宗教」概念をモンゴルに移植してきたと考えられる。そのような考えにもとづき、社会主義の歴史的影響を観念的なレベルで分析するための手段として、概念の歴史的変遷について、社会主義以前と社会主義崩壊後の聖書翻訳について比較研究する。

以上のような通史的な比較研究を踏まえながら、現代における文化的接触の多様化が現代モンゴルにおけるキリスト教受容とどのように関係しているかを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、現代モンゴルにおけるキリスト教受容の諸条件とメカニズムを明らかにするにあたり、これまでの研究成果を踏まえながら、(1) 社会主義以前のモンゴルにおけるキリスト教宣教資料の分析と聖書翻訳における概念の分析を行う。また、(2) 社会主義による西洋＝キリスト教文化の移植プロセスを分析しながら、聖書翻訳の歴史とそのプロセスを連続的に捉える。さらに、(3) 現代におけるキリスト教宣教と聖書翻訳・解釈の問題を、主に草原の遊牧民や国外出稼ぎ労働者におけるキリスト教受容を対象としながら分析し、以上の通史的な比較研究を通して、モンゴルにおける近代化と宗教の関係を明らかにする。

(1) 社会主以前のモンゴルにおけるキリスト教伝道史

社会主義以前のモンゴルにおけるキリスト教伝道の困難は、ポスト社会主義期のキリスト教の台頭と好対照を成している。本研究では、社会主義以前のキリスト教宣教師の活

動をとりあげ、伝道がなぜ成功しなかったのかを歴史資料をもとに分析する。それによって、彼らが何の《境界》を越えることができなかったか、ポスト社会主義期との対比を意識しながら考察する。
特に、宣教師たちが、どのようにモンゴル人の信仰を理解し、また活動の困難を認識していたのか。一方で、モンゴル人が宣教師たちの「宗教」をどのようなものとして解釈していたのか。本研究では、それらの問題について、宣教師側とモンゴル側の双方の記述を分析しながら考察する。
　さらに、社会主義以前には、主なもので4種類の『新約聖書』、3種類の『旧約聖書』がモンゴル語で翻訳出版されているが、それらの翻訳において「神」などの重要な諸概念がどのように翻訳されているかを比較し、その訳語決定の経緯について関連する文献を収集・分析する。

(2) 社会主義による西洋＝キリスト教文化の移植プロセス
　ポスト社会主義期におけるキリスト教受容の条件として、社会主義の歴史的影響が考えられる。特に、マルクス主義にもとづく反宗教政策は、鋳型となって西洋的＝キリスト教的な「宗教」概念をモンゴルに移植してきたと考えられる。
　本研究では、「宗教」を取りまく西洋の諸概念が、社会主義の確立と反宗教政策の実践的文脈のなかでどのように翻訳されてきたかを、宗教関連法案などの公文書を党や政府の公文書館で収集し、マルクスやレーニンなどの著作の翻訳とあわせて分析する。

(3) 現代モンゴルにおけるキリスト教の草原及び国外への展開
　本研究では、これまでの主に都市部におけるキリスト教の受容について行ってきた調査をさらに進展させ、草原における遊牧民や国外出稼ぎ労働者に関する調査を行う。

４．研究成果
　2009年度は、ウランバートル市においてキリスト教会の調査を行い、また英国およびスウェーデンにおいて社会主義以前のモンゴルにおけるキリスト教伝道に関する資料収集を行った。
　ウランバートル市の調査では、教会活動主体が外国人からモンゴル人へと次第に移行していることが明らかになった。また、聖書の改訳作業に関する資料を収集し、1990年以降に始まる現代モンゴル語への聖書翻訳において、特に最近の傾向としては重点が意味内容の翻訳よりも文学的な洗練へと移ってきていることが明らかとなった。教会運営においても聖書翻訳においても、モンゴル人のモンゴル語によるキリスト教という側面が強調され、そこに彼らの民族主義的意識が織り込まれていることも看取された。
　一方、ケンブリッジ大学聖書協会図書館、ロンドン大学東洋アフリカ学院図書館では、社会主義以前のモンゴルにおける宣教師の書簡、その他活動記録についての資料を閲覧、その一覧を作成した。また、スウェーデン王立図書館にてモンゴル伝道に関する論文および書籍の収集を行った。
　以上のような文献およびフィールドワーク資料の分析によって、社会主義の前後におけるモンゴルのキリスト教に対する接触様態の違いが浮き彫りとなり、モンゴルの歴史における社会主義的近代化の意義が再確認された。また、キリスト教に対する反応の一要因としてモンゴルにおけるシャマニズム的文化の影響を考慮する必要性が判明し、シャマニズム的信仰とキリスト教の関係についての比較研究の重要性が明らかになった。

　2010年度は、モンゴル国ウランバートル市においてキリスト教会の調査を行い、また英国において社会主義以前のモンゴルにおけるキリスト教伝道に関する資料収集を2度にわたって行った。
　ウランバートル市の調査では、教会活動において外国人宣教師と現地信徒を結びつけるネットワークが人々の祈りや救いの要求とどのように関係しているかを、主に教会や宣教機関が宣教活動に使用する映像、印刷物の収集、分析によって明らかにした。特に、病気治癒や生活改善などの体験談の共有を通じて広がっていく信徒間の繋がりと、教義的に信徒を救いへ導こうとする宣教師のあいだのずれなどが明らかになった。
　一方、ケンブリッジ大学図書館聖書協会アーカイブ、ロンドン大学東洋アフリカ学院図書館世界宣教会議アーカイブでは、社会主義以前のモンゴルにおける宣教師の書簡、その他活動記録についての資料を収集した。特に、宣教初期における、聖書の「神」という言葉をどのように翻訳すべきかという問題についての議論や、宣教師と現地住民の接触の様態を示す貴重な資料を入手することができた。
　以上のような現在のフィールドワーク資料と過去の文献資料の比較や分析を通して、社会主義以前から現在に至るまでのモンゴルのキリスト教宣教史の全体像が明らかになった。

　2011年度は、昨年度までの資料収集調査に引き続き、英国において社会主義以前のモンゴルにおけるキリスト教伝道に関する資料収集を行った。
　ケンブリッジ大学図書館聖書協会アーカ

イブでは、主に英国外国聖書協会が行っていたモンゴル語訳聖書の翻訳事業に関する記録を収集した。また、ロンドン大学東洋アフリカ学院図書館世界宣教会議アーカイブでは、ロンドン宣教協会が行っていた社会主義以前のモンゴルにおける宣教事業に関連する書簡・ジャーナル等の資料を収集した。宣教初期における宣教師によるモンゴル文化の理解や、そのような理解が聖書翻訳に与えた影響など、宣教初期の異文化接触、異教理解に関連する貴重な資料を入手することができた。また、モンゴルにおける宣教師の書簡やジャーナルに対するイギリス本土での反応など、当時の本国宣教拠点が僻地宣教をどのように捉えていたかを示す資料も入手することができた。

以上のような社会主義以前の文献資料の比較や分析を通して、19 世紀のイギリス本国におけるモンゴル宣教の位置づけや、それが後の宣教事業、聖書翻訳事業に与えた影響について明らかとなった。また、昨年度までの研究成果と合わせて、社会主義以前と社会主義崩壊以後の資料を比較することによって、宣教師とモンゴル住民とのあいだの接触様態の変化が、聖書翻訳や教義、宣教論をめぐる議論と深く関係していることが明らかとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 滝澤克彦、モンゴルの民主化とキリスト教、国際宗教研究所編『現代宗教 2009』、査読有、2009、322-338
② 滝澤克彦、19 世紀前半モンゴル宣教における聖書翻訳をめぐる諸問題とその意義、東北宗教学、査読有、2012、印刷中

〔学会発表〕（計５件）
① 滝澤克彦、現代モンゴルにおける民族、宗教、救い、日本モンゴル学会 2009 年度春季大会、2009 年５月 16 日、仙台
② Katsuhiko Takizawa, Memories of Socialism and Religion in Mongolia: The Persistence and Transformation of Household Rituals, East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies 2010, 5 Mar 2010, Seoul
③ 滝澤克彦、宗教における社会主義という経験をどうとらえるか―モンゴル国の事例から、平成 22 年度東北アジア研究センター「東北アジア地域」に関する共同研究公開シンポジウム「東北アジア地域における宗教の新たな展開―中国とその近隣―」、2011 年２月 27 日、仙台
④ Katsuhiko Takizawa, Crossing borders: Communality of 'Salvation' in Mongolian Christianity, MIASU (Mongolia and Inner Asian Study Unit, Cambridge University) Discussion Group, 8 Mar 2011, Cambridge
⑤ 滝澤克彦、現代モンゴル国におけるキリスト教の浸透と社会的意義―共同性と「救い」の問題を中心に、国立民族学博物館共同研究「ポスト社会主義以後の社会変容－比較民族誌的研究」2011 年度第１回研究会、2011 年７月 16 日、吹田

〔図書〕（計１件）
① 滝澤克彦（編）、他、ノマド化する宗教、浮遊する共同性　―現代東北アジアにおける「救い」の位相、2011、1-8, 127-158

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
滝澤　克彦（TAKIZAWA　KATSUHIKO）
東北大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：８０５１６６９１

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし